

保護者のとらえた幼児の気質的特徴

武井 祐子*1

緒 言

虐待が社会問題化している現在、育児中の親や保育士といった、子どもと関わる人の悩みに対するサポート体制やその内容の充実について、様々な分野で検討されている。子どもに対し、普通の関わりをしているはずなのに、うまくいかない、子どもが分からないと悩んでいる親や保育士は多い。

相談現場では、子どもを理解する方法として、ある一定の尺度を使い、標準と照らし合わせて子どもをとらえることが一般的である。代表的なものとして、発達検査や知能検査などの能力検査、行動特徴や性格をとらえるための質問紙法検査、投影法検査がある。乳幼児期の相談では、能力検査を中心とした心理検査の結果によって、子どもへの理解を深め、方針をたてることが多い。確かに、発達相談などで、子どもを理解する方法としては有効である。しかし、実際には、それらの尺度ではとくに問題がないとされる子どもでも、関わる側に戸惑いを感じさせる特徴をもつ子どももあり、援助が必要となる場合がある。よって、さらに詳細に子どもをとらえ、関わりを検討していくことが必要だと考えられる。

Thomas, A. & Chess, S. (1977, 1980) は、自身の子育て経験および臨床経験から、画一的な子どものとらえ方に疑問を抱き、子どもの特徴をその子の行動特徴、気質という面からとらえようとした^{1,2)}。彼ら以降、子どもの気質についての研究が報告されるようになり、日本でも佐藤 (1985, 1988) や庄司 (1981) らのグループが、子どもの気質をとらえ、望ましい関わりを検討していくよう研究を進めている³⁻⁴⁾。筆者は、相談現場などでの経験から、様々な角度から子どもを理解する方法の1つとして、上記のような子どもの気質特徴を把握することが重要であり、それをふまえて関わりを検討する必要があるのではないかと考えるようになった。

そこで、今回、幼児期における子どもの気質特徴の概観を把握し、関わりについて検討するために調査を行ったので、その結果について報告する。

方 法

1 調査対象及び調査方法

調査対象は、岡山県下にある、私立保育園に子どもが通う保護者240名である。保育園からのおたよりと併せて質問紙を配布、後日回収した。回収期間は、配布から1週間以内とした。回収率は98%であり、有効標本数は234であった。

2 質問紙

Carey (1978) が開発し⁶⁾、庄司が翻訳した乳児気質質問紙を参考に⁷⁾、気質特徴9カテゴリーについて、2つの具体的な状況での質問項目(質問1・2)と全体的な状態の質問項目(質問3)の27項目から成る質問紙を作成した。9つのカテゴリー名については庄司(1999)の日本語訳を使用した⁸⁾。質問1と2は4段階評定、質問3は3段階評定とした。

3 結果処理

今回は質問3について、全体および年齢ごとに整理した。なお、0歳については回答数が少なかったため、年齢ごとの気質特徴の結果および考察の検討からは除外している。

結 果

1 対象者

母親が92% (214人)、父親が4% (10人)、両親が2% (5人)、祖母が1% (3人)、叔母が1% (2人)であった。

2 年齢

0歳が1% (3人)、1歳が11% (25人)、2歳が16% (38人)、3歳が21% (48人)、4歳が19% (44人)、5歳が14% (33人)、6歳が17% (39人)、無回答が2% (4人)であった。

3 性別

男児が51% (119人)、女児が47% (111人)、無回答が2% (4人)であった。

4 気質特徴

各カテゴリーごとの全体および年齢による分布は、

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科
(連絡先) 武井祐子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

図1～9の通りである。

- (1) A 活動水準 (図1) 全体では、半数以上が「高い」としていた(54%)。年齢ごとでは、他の年齢に比べ、3歳で「高い」という評価が多く(71%)、6歳で「中ぐらい」という評価が多かった(62%)。
- (2) B 周期性 (図2) 全体では、半数以上が「規則的」としていた(57%)。年齢ごとでは、他の年齢に比べ、5歳で「規則的」という評価が少なく(46%)、「どちらともいえない」という評価が多くなっているが(52%)、5歳以外は半数以上が「規則的」ととらえていた。
- (3) C 接近性 (図3) 全体では、半数近くが「どちらともいえない」としていた(46%)。年齢ごとでは、他の年齢に比べ、4歳と6歳は「しりごみする」という評価が多かった(4歳; 28%, 6歳; 32%)。
- (4) D 順応性 (図4) 全体では、半数程度が「どちらともいえない」としていた(49%)。年齢ごとでは、他の年齢に比べ、4歳は「慣れやすい」という評価が多く(48%)、2歳は「慣れるのに時間がかかる」という評価が多かった(18%)。
- (5) E 反応の強さ (図5) 全体では、半数以上が「強い」としていた(66%)。年齢ごとでは、他の年齢に比べ、2歳と3歳で「強い」という評価が多く(2歳; 82%, 3歳; 81%)、それ以上の年齢になると次第に少なくなり、6歳では半数以上が「どちらともいえない」としていた(54%)。また他の年齢に比べ、5歳で「弱い方である」という評価が多かった(12%)。
- (6) F 気分の質 (図6) 全体では、90%近くが「よい」としていた(87%)。年齢ごとでは、どの年齢も80%前後が「よい」という評価であるが、「よい」という評価が80%以下であった5歳は(76%)、他の年齢ではない「悪い」という評価もあった(3%)。
- (7) G 注意の範囲と持続性 (図7) 全体では、半数以上が「どちらともいえない」としていた(54%)。年齢ごとでは、他の年齢に比べ、2歳で「長続きする」という評価が少なく(18%)、「どちらともいえない」という評価が多かった(69%)。3歳以上になると、「長続きする」という評価が40%前後まで増えている。
- (8) H 気の散りやすさ (図8) 全体では、半数以上が「どちらともいえない」としていた(57%)。年齢ごとでは、4歳で「気が散りや

すい」(32%)、「どちらともいえない」(39%)、「気が散らない」(30%)という評価に分かれたが、他の年齢は「どちらともいえない」という評価が多かった(55%～66%)。また1歳から4歳まで年齢が上がるにしたがって「気が散りやすい」という評価が多くなった。

- (9) I 敏感性 (図9) 全体では、「敏感である」(50%)という評価と「中ぐらい」(48%)という評価に分かれた。年齢ごとでは、「敏感である」という評価は1歳から4歳まで年齢が上がるにしたがって増え、4、5、6歳では60%前後が「敏感である」と評価していた。

考 察

9 カテゴリーの内容については、表1の通りである。

今回の結果から、幼児期の子どもの全体的な特徴としては、A 活動水準は「高く」、B 周期性は「規則的」で、E 反応の強さは「強く」、F 気分の質は「よい」、ということが分かった。

A 活動水準は、3歳で最も「高い」と評価され、次第に「中ぐらい」と評価が移ることから、3歳では他の年齢よりエネルギーが発散できる活動を取り入れ、4歳から次第に、発散レベルを落とした活動を取り入れていくことが必要だと思われる。E 反応の強さは、2、3歳が他の年齢に比べると、「強い」と評価されている。自己主張の強くなる反抗期の時期をあらわし、本人の反応の「強さ」を尊重しながら、どのように関わっていくかが難しい時期と思われる。G 注意の範囲と持続性、H 気の散り易さは、全体的には「どちらともいえない」という評価が多い。G 注意の範囲と持続性は3歳位より「長続きする」と評価され、H 気の散り易さについては4歳で評価が3分し、それ以降「気が散りやすい」「気が散らない」という評価が減り、「どちらともいえない」タイプの子どもが増えている。つまり、比較的注意が持続できる3才くらいから机上での活動を取り入れることは可能であるが、子どもごとに興味の対象や状態を考慮し、対応を検討することが必要になってくるとと思われる。

Carey(1978)は、Difficult ChildとEasy Childを分類する指標として、B 周期性、C 接近性、D 順応性、E 反応の強さ、F 気分の質をあげている。また、これらの指標を用いて、表2のように子どものタイプを分類している⁶⁾。これは全体的な平均値と比較して評価する指標であるが、各年齢がどのようなタイプと捉えられやすいか検討することで、その年齢の特徴を踏まえたよりよい関わりが可能になってくる

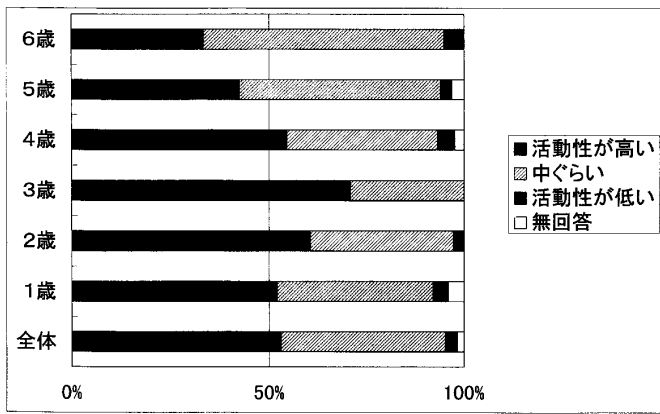


図1 A 活動水準 (Activity Level) 「子どもは活動性が…」

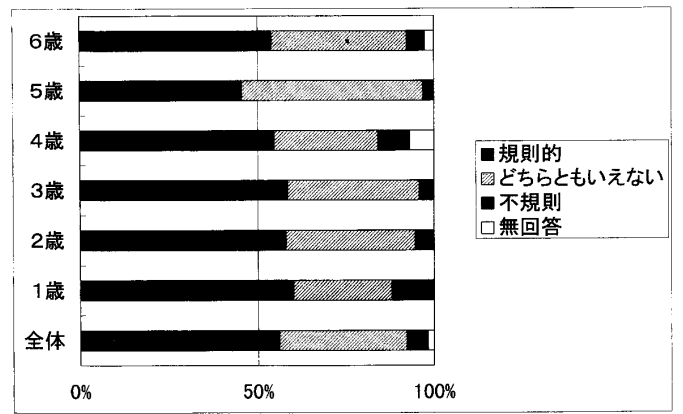


図2 B 周期性 (Rhythmicity) 「生活リズムは…」

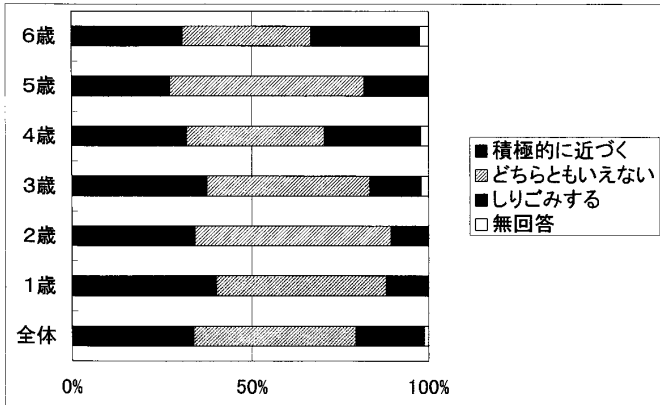


図3 C 接近性 (Approach or Withdrawal) 「新しい状況に…」

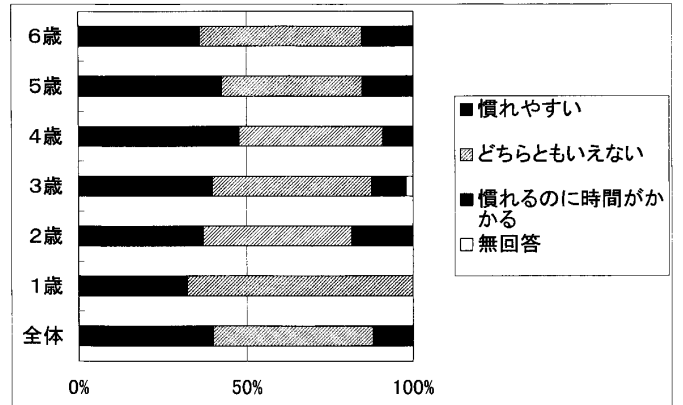


図4 D 順応性 (Adaptability) 「変化に…」

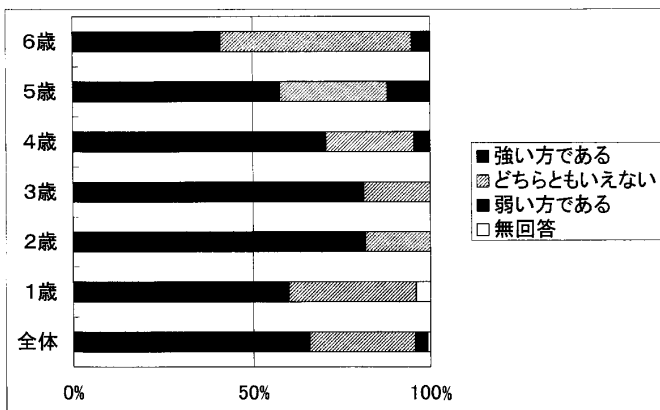


図5 E 反応の強さ (Intensity of Reaction) 「自己主張は…」

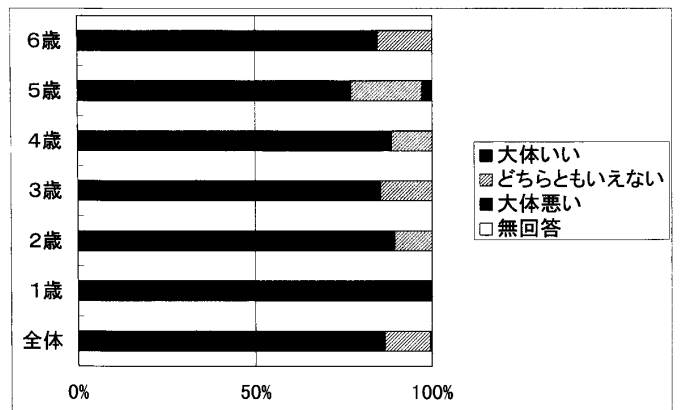


図6 F 気分の質 (Quality of Mood) 「機嫌は…」

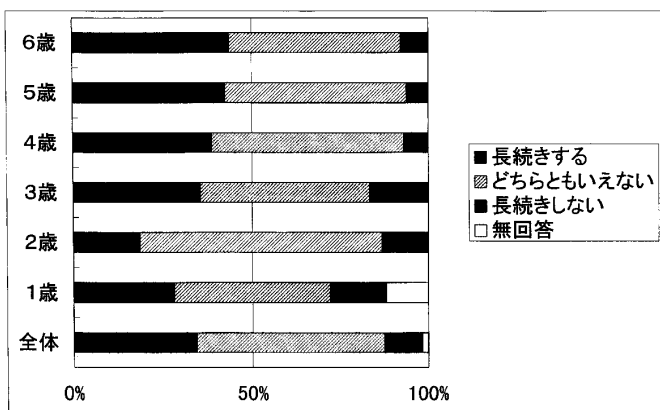


図7 G 注意の範囲と持続性 (Attention Span and Persistence) 「1つのことをするの…」

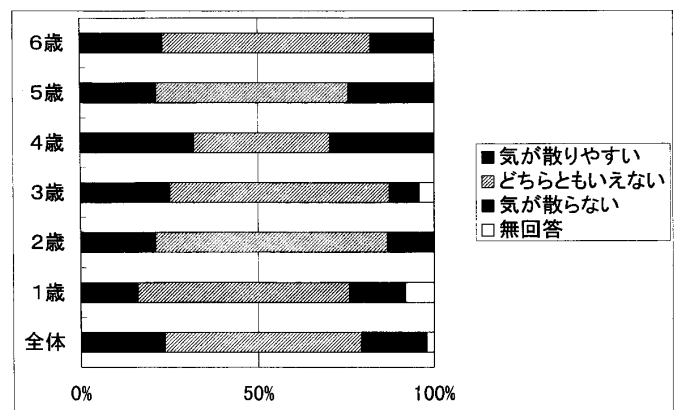


図8 H 気の散りやすさ (Distractibility) 「子どもは…」

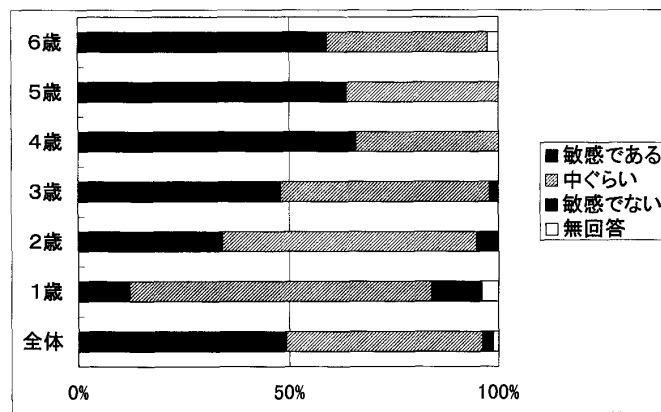


図9 I 敏感性 (Threshold of Responsiveness) 「変化に対して気づくのが…」

表1 気質特徴カテゴリー

A 活動水準 (Activity Level)	運動レベル, 活発さ
B 周期性 (Rhythmicity)	生活リズム (食事・排泄・睡眠などの規則性)
C 接近性 (Approach or Withdrawal)	新しい刺激 (人, 玩具, 場所など) への最初の反応
D 順応性 (Adaptability)	新しい状況や環境変化への慣れ易さ, 行動調整
E 反応の強さ (Intensity of Reaction)	反応の強・弱, 明確さ・不明確さ
F 気分の質 (Quality of Mood)	肯定的気分 (嬉しい・楽しいなど) と否定的気分 (つまらない, 不愉快など) の割合
G 注意の範囲と持続性 (Attention Span and Persistence)	特定の活動をする時間の長さ, 何かに邪魔された時に再度もとの活動に戻るか
H 気の散りやすさ (Distractibility)	取り組んでいることが刺激によって妨害されやすいか
I 敏感性 (Threshold of Responsiveness)	反応閾値, 行動を起こさせるために必要な刺激の強さ, 感受性

表2 カテゴリー分類

Easy Child	Difficult/Easy カテゴリーのうち平均より得点が高いのが2つ以下で, かつ+1SD 以下であるもの.
Difficult Child	Difficult/Easy カテゴリーのうち4つ以上が平均より高く, この中に必ず反応の強さを含み, かつ2カテゴリーが+1SD 以上のもの.
Slow to Warm up Child	A 活動水準, E 反応の強さのカテゴリーが平均より低く, C 接近性, D 順応性, F 気分の質のカテゴリーが平均より高いもの.
Intermediate	上記以外のもの.
Intermediate high	Difficult / Easy カテゴリーのうち4つ以上が平均より高く, 1SD 以上のものは1項目のみである. または, Difficult / Easy カテゴリーのうち平均以上高いのが, 2~3項目でかつ1SD 以上が2~3項目のもの.
Intermediate low	その他, 上記以外のもの.

と思われる。今回は年齢ごとの特徴を概観する目的で、あえてその指標と照らし合わせ、検討してみた。

Difficult Child の指標で重要な E 反応の強さ について、「強い」と評価する割合が多いのは2, 3歳児であった。このことから、2, 3歳は他の年齢に比べ、関わりが難しい子どもと評価されやすい年齢と予想された。1歳は他の年齢に比べると、B 周期性 は「規則的」で、C 接近性 は「積極的に近づき」、D 順応性 は抵抗も大きくなく、F 気分の質 は「よ

く」、E 反応の強さ は2, 3歳ほど強くないことより、比較的関わりやすいと評価されやすい年齢と予想された。6歳は他の年齢に比べ、C 接近性 は「しりごみする」、A 活動水準 は「中ぐらい」と評価され、E 反応の強さ は「どちらともいえない」と評価されることより、Slow to Warm up Child に近い状態に評価されやすい年齢と予想された。

今回は、幼児期における子どもの気質特徴の概観を把握し、それに応じた対応について若干の検討を

行った。今後は、今回の結果をふまえ、さらに質問項目を増やし、より詳しく、年齢ごとの特徴だけで

なく、それぞれの子どもの特徴を踏まえた関わりについて検討していきたいと考えている。

文 献

- 1) Thomas A and Chess S (1981) 子どもの気質と心理的発達。林雅次(監訳)、初版、星和書店、東京。
- 2) Thomas A and Chess S (1977) *Temperament And Development*. Brunner/Mazel New York.
- 3) 佐藤俊昭(1985) 子どもの気質の追跡研究—序報—。東北大学教養部紀要, **43**, 171 (1)–151 (21)。
- 4) 佐藤俊昭(1988) 子どもの気質の追跡研究: 第2報・日本語版 ITQ-R とその使用経験。東北大学教養部紀要, 196–175。
- 5) 庄司順一, 前川喜平(1981) 乳児の気質—その意義と評価法。小児科診療, **44**, 1225–1232。
- 6) Carey W B and Mcdevitt S C (1978) *Revision of Infant temperament questionnaire*. *Pediatrics*, **61**, 735–739。
- 7) 庄司順一 行動様式質問紙(乳児用)。
- 8) 庄司順一(1999) 子どもの気質と発達。小児保健研究, **58**, 2, 132–137。

(平成13年6月7日受理)

Parent's Impressions of Toddler Temperamental Characteristics

Yuuko TAKEI

(Accepted Jun. 7, 2001)

Key words : TEMPERAMENT, TODDLER, ASSESSMENT

Correspondence to : Yuuko TAKEI

Department of Clinical Psychology, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.11, No.1, 2001 179–183)